

## 日本人会の組織化時代（法人会費規定の制定）

元日本人会会長（ジェットロウイーンセンター所長） 赤池 俊光

着任当初は駐在企業の家族が合わせて百数十名、その他音楽留学生を含めて5～6百名の日本人がウィーンで生活していたと思います。駐在企業は、駐在を許されなかった東欧諸国のビジネスをウィーンの事務所で行っていました。駐在企業は、ビジネスを進めるため「さきがけ会」という連絡会をつくっていました。駐在員は、東欧諸国の仕事をするために、月曜日から金曜日まで東欧に出張し不在となり、日本人会の活動は手薄になりがちでした。日本人会の運営は、日本大使館の指導と後援を仰ぎながら、ウィーンで仕事をしている日本航空の所長が会長となり、UNIDOのメンバー、ウィーン在住の小熊さんが中心になり、それに加えて、さきがけ会代表、JETROのメンバーが理事となり行われていました。日本人会は、小熊さんが積極的に活動され、強化されていきました。日本人補習学校も日本人会事務所に教室を移転しました。1971年11月26日（金）に開かれた日本人会理事会では、活動の強化を図り、会長のもとに総務、教育、スポーツ、音楽、娯楽の5部門と監査を設け、正副2名、計13名で運営することを決めました。多忙であった「さきがけ会」メンバーも8名が参加しました。この日、補習学校の輪転機、机、椅子、教卓、事務所のヒーターなどの補填購入、法人会費の納入規定を決めています。補習学校の補填購入費用は、大使館、父兄、日本人会が均等に負担しました。日本人会事務所には月曜日から金曜日まで午前10時から午後3時まで事務員が常駐するようになり、ウィーンにいる日本人が気軽にいろいろな相談や案内を受けることができるようになりました。日本人会、補習学校は徐々に整備されました。日本人会主催の旅行会や音楽会も開催され、在留日本人の親睦が図られるようになりました。

当時の背景は、オーストリア人の多くが日本に対する認識は低く、中国人と混同し、日本がどこにあるのか知らない人がいました。自動車の運転免許証は自動書き換えが無く、学科と運転の試験があり、取得する煩わしさがありません。滞在ビザの更新は、近隣諸国のアルバイターと同様に、大変混雑する窓口での手続きを要求され、健康診断書（伝染病も含めて）も添付させられました。オーストリアの大学における日本人留学生の待遇は発展途上国と同様に扱われ、授業料は免除されていました。このような時代でしたが、日本料理店が出店し、懐かしい食事ができるようにもなりました。円切り上げのニクソンショックや原油価格が4倍に急騰したオイルショックの時代でしたが、世界における日本経済の進展が注目されるようになり、日本の存在価値が高まるようになりました。日本における札幌の冬季オリンピック開催も日本を理解する上で大きな貢献をしたと思います。

日本人会の活動もようやく軌道に乗り、滞在に不便な制度の改善にも取り組みました。日本の認識度が徐々に高まるに従い、ウィーンにおける日本人の生活環境は良くなってきました。

<赤池 俊光（あかいけ・としみつ）>

1971年7月～74年8月、JETROウィーンセンター所長

1972年～74年日本人会会長、現在は毎日が休日の隠居生活です。